

## 『嗚呼 満蒙開拓団』に寄せて

滝永 登

この映画を見たのは、まったくの偶然といってよい。たまっていた仕事が一段落し、少しずる休みをしたい気分になって、職場のパソコンで映画館情報を検索し、この映画の存在を初めて知ったのだ。題名から判断してこれならよしと決め、早速休暇届を出し、神保町へ向かった。平日の昼間だったので楽に座れると予想し、上映開始直前にたどりついたのだが、館内はほぼ満席。こうした映画にもしっかりと客が入るということを知って、心強く感じた。しかし、時間帯からして当然で、客席はほとんどが高齢者。自分自身そろそろ老境にさしかかる年代なのだが、ここでは十分に若手で通用する。しかし、考えてみるとこれは時間帯のせいではないのかもしれない。夜間や休日ならなおさら、若い人たちはこの映画館には来ないにちがいない。若い世代には、残念ながら、この映画は人気がない。

私は、今の社会風潮の中では決して評判がよいとは言えない「戦後民主教育」を最も純粋な形で受け入れた世代だ。「自由」、「平等」、「平和」といった理念が、手あかが付かず、きまじめすぎるくらいに語られていた。そうした中で、今なら「偏向教育」として袋だたきにあいかねない「平和教育」を受けることができたことを、私は素直に感謝している。「平和教育」の主眼は、当然「あの」戦争だ（名称がいまだに定まらないのも奇妙な話だ）。「8月15日は何の日か」という教師の問いかけに、多くの子どもたち（もちろん私もそのひとり）は「戦争が終わった日」と答えた。それに対して、その教師が「それだけでは正しくない」と応じた。そのときの彼の必死の語りかけは、今でも強く印象に残っている。今の子どもたちは、「戦争が終わった日」とさえ答えることができないのでは。

カップブックスの『三光』で中国戦線での日本軍の実態を知り、一方でスノーやスメドレーを通して中国共産党の英雄的なたたかひを知ったのは、高校から大学へ進む頃だった。『人間の条件』一挙上映を有楽町の映画館で見たのもそのころのはずだ。後付けの知恵で、これらの書物に描かれた「歴史的事実」には一部修正が必要なこと、また歴史の複雑な過程を単純な「善悪」だけで解釈してはならないことを学んだが、この戦争の基本的な構造（侵略と被侵略、加害と被害）に対する理解は今も変わらない。近年の中国の過剰なナショナリズムの昂揚に比例するがごとくの「反中」、「嫌中」意識の高まりと「自虐史観」なる気味の悪い造語の広がり、日中戦争の存在そのものまでをも消し去ろうとするならば、「戦後民主教育世代」の意地に賭けても抵抗せざるを得ない。

しかし、問題はこれだけにとどまらない。日本の軍隊は、日本の民衆（それも最も弱い立場の）に対しても加害者であったということだ。沖縄における「集団自決」と旧「満州」

における「残留孤児」の問題こそ、日本軍は決して民衆を守らなかったという悲しい事実を教えてくれた。ソ連参戦を知るや真っ先に逃げ出したのが、関東軍と満鉄の幹部連中とその家族たちであった。多くの人々には、参戦の事実さえ知らされていないうちにだ。「残留孤児」の報道に接して涙を流さない人はいない。悲劇のあまりの大きさに心痛めるだけでなく、「孤児」本人や養父母らのその後の人生のドラマに、大いに心揺さぶられるからだろう。だが、「残留孤児」として生き延びた人たちは、まだ幸せであった。当然のこととして、取り残された多くの人たちは、飢えと寒さに苦しみながら彼の地で死に果てたのだから。

ここまでは、以前から私が知識としては持っていたことである。話はさらにその次があることを、この映画を見て初めて知った。すなわち、「方正日本人公墓」である。公墓を建ててほしいと願いでた日本人、それを支えた中国人、さらにその後40年以上にわたってこの公墓を守り続けてきた両国の人々の努力と熱意を私は無条件に支持する。こうした努力の積み重ねこそが、つきなみかもしれないが、二度と悲劇を繰り返させない力になると信じるからだ。

ほんの暇つぶしのつもりで何か映画をと思ってこの作品を選んだのは、題名にひかれたからだけではない。それ以上に羽田澄子さんの作品であるということが、大きな理由である。羽田さんの作品に共通する、被写体に対する暖かいまなざしは、いつも私を励ましてくれる。この映画を通じて、羽田さん自身の少女体験を知り、こうした映画を作る「必然性」のようなものをあらためて感じた。

この映画の収穫がもうひとつある。本誌の編集責任者でもある大類善啓さんの名を映画のエンドロールに発見したことである。大類さんとは、実は40年近くも前に何度かお会いしているのである。その一つは、私が参加していた学生エスペラントサークルの合宿に、なぜか学生ではない大類さんが（その時は、週刊誌の記者をやっていると聞いたような気がする）一緒に参加していたのだ。そういう時代だったのだろう、エスペラントの学習よりは政治的な議論に熱くなっていたのが、今では懐かしい。

（たきなが・のぼる：1950年東京生まれ。学生時代に世界共通語エスペラントに親しみ、東京学生エスペラント連盟に参加。1974年東京都庁に就職、現在に至る）